

### 3 活動報告（Ⅱ 研究）

#### 地域志向型教育研究

学内公募を行い平成26年度8課題、平成27年度7課題を「地域志向型教育研究」として採択し、社会貢献活動及びその教育プログラム化に資する知見の蓄積を行っています。

## 地域志向型教育研究採択研究課題一覧

平成26年度

番号	研究代表者		研究課題名
	所属	氏名	
1	文学部	スザンネ バロッグ	地域の就学前児童への英語読み聞かせプロジェクト
2	生活科学部	近藤 真紀	食用藍の機能性成分に関する研究
3	看護学部	佐藤 千津代	大学と訪問看護師が協働で進める技術研修を通じた学生への意識改革の試み
4	生活科学部	中岡 泰子	阿波みかん発祥の地・勝浦町で学ぶ農家の課題解決～体験を通じて地域活性化を考える～
5	生活科学部	有内 則子	藍に関する研究(藍染め。藍の基礎研究、高校との共同研究)
6	生活科学部	服部 大輔	持続可能な発展のための地域MICE誘致 －三好市の四国酒まつりにおける事例－
7	看護学部	橋本 茂	過疎(中山間)地域の医療・福祉を担う人材の循環形成への取り組み ①地域医療福祉のニード調査
8	経営情報学部	姜 判国	地域創生のための地域社会企業家育成システムの構築

平成27年度

番号	研究代表者		研究課題名
	所属	氏名	
1	文学部	スザンネ バロッグ	地域の就学前児童への読み聞かせプロジェクト
2	文学部	フェネリー マーク	避難シュミレーション等を通じた、ボランティアコーディネーター育成プロジェクト
3	経営情報学部	尾崎 圭司	地域の企業・経済団体および電子商取引企業と協力した電子商取引教育環境の構築に関する研究
4	生活科学部	中岡 泰子	地域貢献型人材育成のための体験型カリキュラムの開発
5	生活科学部	近藤 真紀	食用藍の機能性に関する研究
6※	生活科学部	高橋 啓子	徳島の食文化に関する研究一次世代に伝え継ぐ徳島の家庭料理－
7	生活科学部	田村 典子	舞台表現をベースとした地域活性化人材育成プログラムの開発に関する研究

※ 平成27年度実施6の研究課題については活動の中心が平成28年に実施されるため、平成28・29年度実績報告書に掲載の予定

## 活動テーマ

地域の就学前児童への英語読み聞かせプロジェクト

## 活動の概要

パペットシアターや絵本の読み聞かせによって、地域の児童に英語に触れる機会を与えるプロジェクトです。

代表者名 : スザンネ バログ (文学部 国際文化学科 准教授)

活動メンバー : ESSクラブ、人形劇クラブ、専門ゼミナールメンバー、児童学科のメンバー

実施場所 : World Plaza (L館3階) 附属幼稚園 生光幼稚園 Log House など

## 活動期間／スケジュール

平成26年12月 8日・24日	幼稚園や保育所などの研究授業
平成26年12月22日	クリスマスパーティー
平成27年 2月12日	Valentine Concert
平成27年 3月26日	英語で遊ぼう

## 実施した活動内容

### 1. クリスマスパーティー (12月): ESSクラブ+人形劇クラブ (World Plaza)



## 実施した活動内容

### 2. 幼稚園や保育所などの研究授業(12月): 専門ゼミナールの学生



### 3. Valentine Concert (2月): ESSクラブ+児童学科 (生光学園Log House)



### 5. 英語で遊ぼう (3月): ESSクラブ (World Plaza)



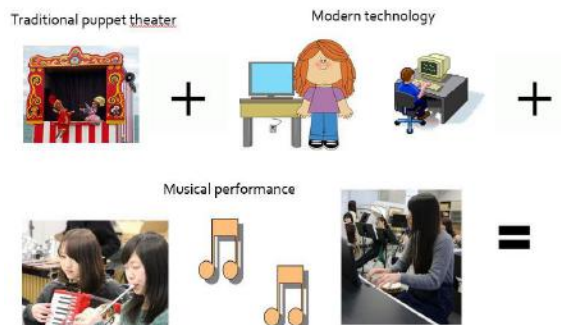
## 活動成果

学生は、(1) 小さい子供に教える技術 (2) プレゼンテーション技術 (3) 他の学部学科の教員とのかかわりによるコミュニケーション能力 等を養った。

また、地域での活動に対しては、100名以上の子供の参加があり、絵本やパペットシアターにより英語に触れる機会を得、外国の言葉や文化に気付きを与える時間を提供できた。

## 課題及び今後の展望

パペットシアターに、ICT技術(プロジェクタを使った背景の転換)や音楽を取り入れることにより、パフォーマンスを上げれば、楽しく多様な公演ができると考えている。



## 活動テーマ

大学と訪問看護師が協働で進める技術研修を通じた  
学生への意識改革の試み

## 活動の概要

地域の訪問看護師へ実践レベルの技術研修を実施し、その研修に学生を参加させることで、学生の意識改革を試みた。同時に訪問看護師への教育支援を行った。

代表者名：佐藤 千津代（看護学部 看護学科 講師）

活動メンバー：看護学部看護学科2年生5名、4年生11名、地域の現職訪問看護師14名、講師4名

連携先名：四国大学看護学部看護学科

実施場所：四国大学在宅看護領域演習室

## 活動期間／スケジュール

平成 26 年 10 月 ～平成27 年 2 月 事前調査

平成 27 年 1月 打合せ

平成 27 年 2月21日(土) 平成27 年 3月7日(土) 実施

## 実施した活動内容

団塊の世代が75歳以上になる2025年に向かって、認知症高齢者の増加や高齢化が加速される中、国は地域包括ケアシステムを構築し、在宅ケアを推進していきたいと考えている。在宅ケアを支える訪問看護師の育成にも力を入れていきたいと考えているが、計画通りに訪問看護師が増えていかない現状がある。そこで、看護学生の頃から、また、卒業年度に訪問看護師を目指してもらうために、現職の訪問看護師とともに研修を実施し、学生の意識改革をしていきたいと考えた。同時に訪問看護師への教育支援をしたいとも考えた。そのために「訪問看護技術研修」を計画し、現職訪問看護師と学生とともに学ぶ機会を2回設けた。

H27年2月21日(土)

「フィジカルアセスメント」研修実施。訪問看護師14名、2年次生5名参加。講師に地域の医師と訪問看護認定看護師を依頼。大学が所有するシミュレーション人形を用いて、呼吸音、心音、腸蠕動音を聴診する演習を行った。シミュレーション人形で様々な病態の異常音も学ぶことを目的とした。また、講師が事例を用いて、問診技術を学ぶ技術も演習、指導した。

H27年3月7日(土)

「褥瘡予防とケア」研修実施。訪問看護師7名（1回目と同じ看護師）、4年次生11名参加。講師に福祉用具事業者の専門員と地域の中核病院の皮膚排泄ケア認定看護師を依頼。モデル人形を使用し、褥瘡のケア技術を指導、演習した。福祉用具では褥瘡予防の最新機器紹介、ポジショニングを指導、演習した。



## 学生のリポート

### 1回目「フィジカルアセスメント」研修 : H27年2月21日(土)

- ・教科書や授業の演習だけでは学べないことを吸収できる機会になった。実際に現場で働いている看護師と、1日かけて一緒に学ぶ機会は貴重だった。
- ・訪問看護師は知識も豊富ですごいなあと思った。今後に生かせる学びだった。
- ・現場の看護師の考え方を学ぶことができた。参考になることがたくさんあった。

### 2回目「褥瘡予防とケア : H27年3月7日(土)

- ・褥瘡について深く知ることができた。
- ・より実践的な内容を学べた。
- ・教科書では学べないことが学べた。就職前に学べて、自身の看護技術の自信につながった。
- ・応用を教えてもらい実際に働く際の役に立った。
- ・教科書だけで学んでもイメージできなかったのが、実際を知ることができてよかった。
- ・実際の現場でのことや、どうしたらよいかとか、根拠等教えてもらいとても学びが多かった。



## 学外協力者リポート

### 参加現職看護師 : 2月21日、3月7日

- ・学生と一緒に学べるのは楽しい。いつか訪問看護師になってくれるのを期待している。
- ・自分たちも新しい技術を学ぶことができた。
- ・実践の訪問看護師は患者さんを看るとき、こんな視点と技術を持っているということを知ってもらえたかと思う。訪問看護に少しでも興味を持ってくれたらうれしい。
- ・今後もこのような研修に参加したい。(全員アンケートに回答があった)

## 活動成果

期待した以上に学生の学びが大きかったことに驚いている。2年生にとっては、現職訪問看護師の凄さを垣間見た感じであったと思う。教員から見ると、実践看護師はこういうものだとかわかっていても、学生にとっては本当に大きな存在に見えるのだということに驚かされた。それだけ自分のレベルが実践レベルにほど遠いことが分かったのであろうと思う。

また、4年生にとっては、就職直前であったため、入職後すぐに役に立つ実践レベルの内容であったことから非常に有用な研修であったことがうかがえた。

現職訪問看護師の評価も非常に高かった。研修に満足できたと答えた人が100%あった。

## 課題及び今後の展望

### 課題

- ・2回目の現職訪問看護師の研修参加者が少なかったことや、アンケート結果から研修日時の再考が必要である。現職訪問看護師の向学心は高いので、集中して研修を受けられるような日時を設定する必要がある。
- ・現職訪問看護師の教育支援も兼ねているため、さらに器機機材を充実させる必要がある。

### 今後の展望

4年次生の評価が非常に高い研修であった。理由は、即実践に使える技術であったから。このことを考えると、入職前に技術に関する研修を卒業前に計画することも考えてみる。

徳島県の看護師は県外で研修を受けることが困難なことが多い。理由は都市部へのアクセスが悪い。したがって、県内で今後も地域のために教育支援をしていきたい。

## 活動テーマ

阿波みかん発祥の地・勝浦町で学ぶ農家の課題解決  
～体験を通じて地域活性化を考える～

## 活動の概要

学生がみかん農家に出向き、作業の手伝いや聞き取り調査を通じて、農家や地域が抱える問題について考え、解決してくための手法を学ぶことを主な目的とした教育研究である。

代表者名 : 中岡 泰子 (生活科学部 生活科学科 教授)

活動メンバー : 服部 大輔 (生活科学部 生活科学科 准教授)  
有内 則子 (生活科学部 生活科学科 講師)

連携先名 : 勝浦町産業交流課, 徳島阿波おどり空港

実施場所 : 徳島県勝浦郡勝浦町

## 活動期間／スケジュール

平成26年12月	みかん収穫ボランティア体験 (於: 勝浦町松下氏のみかん農園)
平成27年 1月	講演会「勝浦貯蔵みかんの歴史・栽培・機能」 (於: 四国大学) みかん農園主に対する聞き取り調査の実施 (4軒の農家を訪問)
平成27年 2月	活動のパネル展示 (於: 四国大学交流プラザ) 貯蔵みかん試食・販売PR体験 (於: 勝浦町ビックひな祭りイベント会場) 貯蔵みかん出荷ボランティア体験 (於: 勝浦町倉坪氏みかん農園)
平成27年 3月	活動のパネル展示及びPR体験 (於: 徳島阿波踊り空港)

## 実施した活動内容

以下の活動について、延べ64名の学生(生活科学科1～4年生)がボランティア体験・調査活動に参加した。

- ① 勝浦町みかん収穫ボランティア体験 23名
- ② 講演会(講師;勝浦町産業交流課長) 15名
- ③ 勝浦町農家インタビュー(4カ所) 3名
- ④ みかん農家看板作成 3名
- ⑤ 坂本おひな街道飾り付け 4名
- ⑥ 勝浦貯蔵みかん試食・販売PR体験 6名
- ⑦ 勝浦貯蔵みかん出荷ボランティア体験 3名
- ⑧ とくしま阿波踊り空港パネル展示 3名
- ⑨ とくしま阿波踊り空港でみかんPR活動 4名



みかん収穫ボランティア体験 (12月12日)

当初の計画は上記の①～③の活動であったが、学生が実際に地域に入ることによって新たな課題や地域の方々からの要望が出現した。それに学生が応えるかたちで④～⑨の活動が展開された。



みかん収穫ボランティア体験 (12月14日)



講演会 (1月20日)

## 学生のレポート

みかん収穫ボランティア体験後の感想文では、仕事の大変さや後継者不足を実感したという声が多く聞かれ、これからも手伝いたいという使命感に溢れる内容がみられた。みかん収穫ボランティア体験後も、みかん農家インタビュー調査、みかんの選別・出荷体験、貯蔵みかんのPRなど、学生は様々な活動に積極的に参加した。学生からはこの地域の課題解決に向けて真剣に考えたいという気持ちが語られ、地域志向が深まったと言える。



インタビュー調査（1月27日及び28日）



選別・出荷体験（2月25日）

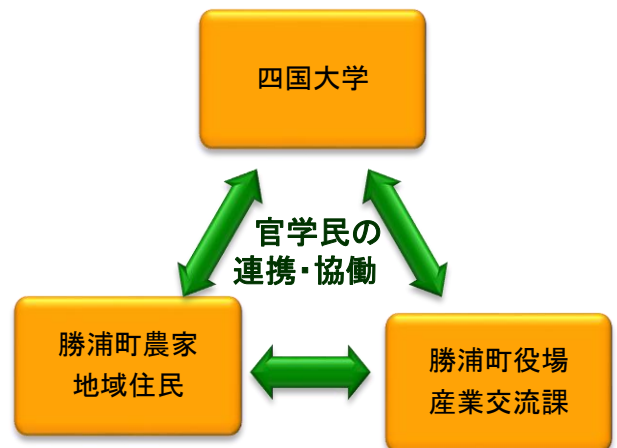


貯蔵みかんPR（2月22日）

## 学外協力者レポート

みかん収穫ボランティアの受け入れ農家さんからは大変喜ばれ、来年度も来て欲しいという言葉を受けた。この活動の取組みについては、様々な場面で紹介され、他の農家からも手伝いの要望が勝浦町産業交流課に届いている。

今後この活動を継続し充実していくためには、地域の人々の意見や要望も伺いながら、官学民の連携を深めていく必要がある。



## 活動成果

みかん農家のインタビュー調査では、学生がインタビュー項目を検討するところから計画し、学生が主体的に実施した。

インタビュー調査からは、高齢化・後継者問題だけでなく、みかん農家の成功事例も直接聞くことができ、地域再生に向けての課題について洞察力を磨くことができた。

また、徳島阿波おどり空港に、本活動のパネルを学生が設置し広報した。活動の一部は、勝浦町の広報誌や地元タウン誌、徳島新聞に記載され紹介された。



徳島新聞記事

## 課題及び今後の展望

参加学生の中には、みかん農家を対象とするインタビュー調査をさらにすすめ、勝浦町の魅力や活性化をテーマに卒業研究に取り組みたいという学生も出てきており、さらに継続して研究を進めていく必要がある。

また、みかん収穫ボランティア体験とインタビュー調査を、平成28年度からスタートする学科専門科目「フィールド研究」の一部に取り入れることを視野に入れている。そのため、ワークブックの作成や教育効果の測定についても検討していく必要がある。専門課程の中でどのようにして地域貢献型人材を育成してゆくのかわ、他の活動も含めてカリキュラムの体系化についても検討していきたいと考えている。



## 活動テーマ

藍に関する研究  
(藍染め、藍の基礎研究、高校との共同研究)

## 活動の概要

藍の基礎研究として、小規模藍建ての方法、藍植物の栽培方法、品種による生育の違いなどを検討する。また、新しい藍の活用方法として木材への利用方法を検討する。

代表者名 : 有内 則子 (生活科学部 生活科学科 講師)

活動メンバー : 瀬部昌秀(生活科学部 生活科学科 准教授)  
井村雄三(四国大学 附属幼稚園研究顧問)  
生活科学部 生活科学科3年生

連携先名 : 川西和夫(城西高等学校、教諭)

実施場所 : 四国大学, 城西高等学校, 吉野川高等学校、美馬市脇町 吉田家住宅

## 活動期間／スケジュール

平成26年 12月 ~ 27年3月 藍建て実習および記録

平成26年 12月 ~ 27年1月 藍染おもちゃ試作

平成26年 12月 ~ 27年3月 城西高校、吉野川高校と共同研究  
(種子の保存、藍栽培の基礎研究)

## 実施した活動内容

### 1 少量藍建ての研究

一般的な藍の仕込み分量は、1.5石甕(約270リットル 20kg建て)仕込みであり、家庭や学校現場では利用しにくい現状がある。費用に関しても、1.5石甕仕込みではおよそ6万円の材料費が必要となり負担も大きい。しかし、小規模であっても十分に藍染を楽しむことができる。そこで小規模で行える藍建ての方法(70リットルポリ容器 4kg建て)を普及するために、仕込み手順、発酵経過を撮影しマニュアル(パンフレット)作成のための資料作成を行った。



現在、徳島県で生産される藍染料「すくも」は年々生産量が減少し、十分供給されていない状況である。その原因は、原料となる葉藍の生産農家の数高齢化により減少していることがあげられる。伝統産業を支える基盤となる藍栽培の技術の継承は急務であり、業界からの要望でもある。

## 実施した活動内容

### 2 藍の種子の保存活動

3月に城西高校と吉野川高校、四国大学で藍の種子を分担して栽培し、種子の保存活動と栽培の基礎研究を行った。3月20日(藍の種子を播種した)11月(種子の収穫)

保存品種名

広島神辺、松江、紺葉、百貫、宮城、大千本  
粉上粉白花、粉上粉赤花、大千本、赤茎中千本



### 3 藍染めの可能性の追求

藍染の新たな利用の可能性を探るため、桐、杉材など木材を藍染し、その染色性の検討と作品の試作を行った。木材は県産の杉、ヒノキなどを用い、木材加工、組み立てなどは四国大学附属幼稚園研究顧問の井村雄三先生に協力をいただいた。

## 藍染木材による 手作りおもちゃの制作

新しい視点での藍染分野を開くことを目的に、藍染木材を利用したおもちゃの制作に取り組みました。まずは、今年回収した木を染めて知育ブロックを制作し、実際に遊んでもらいました。また試作として、一輪挿しの制作も行いました。染色後の木材は水分を含み形が変わっているため、乾燥のさせ方、接着のタイミングが難しく今後の課題となっています。27年度は学生によるアイデアで商品化を目指し制作を続けて行く予定です。



制作指導：井村雄三

四国大学附属幼稚園 研究顧問 / 玩具作りおもちゃ小隊  
徳島県庁芸術文化振興課 宇北 正

四国大学生活科学科 SHIKOKU UNIVERSITY  
四国大学生活科学部生活科学科 〒771-1192 徳島市市神町吉川字成子野123-1

文部科学省 地(知)の拠点

## 活動成果

○ 藍種子の保存活動を高校と連携して実施した。平成26年度は、年度内に計画を立て播種を行った。平成27年度は、生育調査を行い、種子の保存活動を実施したい。

○ 木のおもちゃは乳幼児期から遊ぶことができ、自然素材で環境にもやさしい。幼い時期から藍染製品に触れる機会があるということは、地域の歴史や文化への興味を喚起するきっかけとなると考えられるために、藍染の木のおもちゃ作りに取り組んだ。また、デザイン性を検討し、商品化を考え、幼児の知育玩具として定番であるチェッカーパズルを制作した。また、インテリア商品として一輪挿しの制作も行った。

これらの作品は、平成27年3月14日(月)～22日(月)まで吉田家住宅で展示した。

## 課題及び今後の展望

新しい視点での藍染分野を開くことを目的に、藍染木材を利用したおもちゃ作りに取り組んだ。市松模様の知育ブロックを制作し、実際に遊んでもらった。また試作として、一輪挿しの制作も行った。染色後の木材は水分を含み形が変わっているため、乾燥のさせ方、接着のタイミングが難しいこと、染料の定着が悪く、色移りすることがあり、今後の課題となっている。

平成27年度は学生によるアイデアで商品化を目指し制作を続けて行く予定である。

種子の保存は、今後の藍栽培用の品種改良にはなくてはならないもので、その活動は重要であると考えられる。また、藍栽培に関する基礎研究は不十分であり、基礎的な研究の必要があると考えられる。

## 活動テーマ

持続可能な発展のための地域MICE誘致  
-三好市の「四国酒まつり」における事例-

## 活動の概要

観光の第三需要として誘致に力が入れているMICE（研修・報償旅行・会議・展示会）の地域法が育成のための手法をインタビュー調査等を通じて検討する中で、地域貢献型人材育成を目指した。

代表者名：服部 大輔（生活科学部 生活科学科 准教授）

活動メンバー：中岡 泰子（生活科学部 生活科学科 教授）  
有内則子（生活科学部 生活科学科 准教授）

連携先名：阿波池田商工会議所（四国酒まつり実行委員会） 徳島県庁交通戦略課

実施場所：三好市池田町

## 活動期間／スケジュール

平成26年12月18日	事前打合せ
平成27年 1月14日	事前打合せ
平成27年 2月 5日	事前打合せ
平成27年 2月10日	事前打合せ
平成27年 2月21日	インタビュー調査
平成27年 3月	空港でのパネル展示

## 実施した活動内容

四国大学は、インタビュー調査・アンケートの内容の考案を担当。

### 1 事前打合せ（計4回）。

当初、学生のボランティア活動も盛り込んでいたが、クリエイティブな活動も手伝って頂きたいとの要請があったため、インタビュー調査を実施し、酒祭りの魅力分析を中心に行うこととなった。

### 2 調査、ボランティアの実施

平成27年2月21日（土）の「四国酒まつり」の実施日に、学生・教職員・徳島県職員とともに現地に入り、インタビュー調査を実施した（101件）。また、試飲会場では、四国酒まつり実行委員会が約1,000件の記述アンケートを実施した。

### 3 パネル設置

徳島空港、美馬市吉田家住宅において、四国酒まつり及び生活科学科が行っているCOC関連事業についてのパネルを学生が設置した。

## 実施した活動内容



## 活動成果

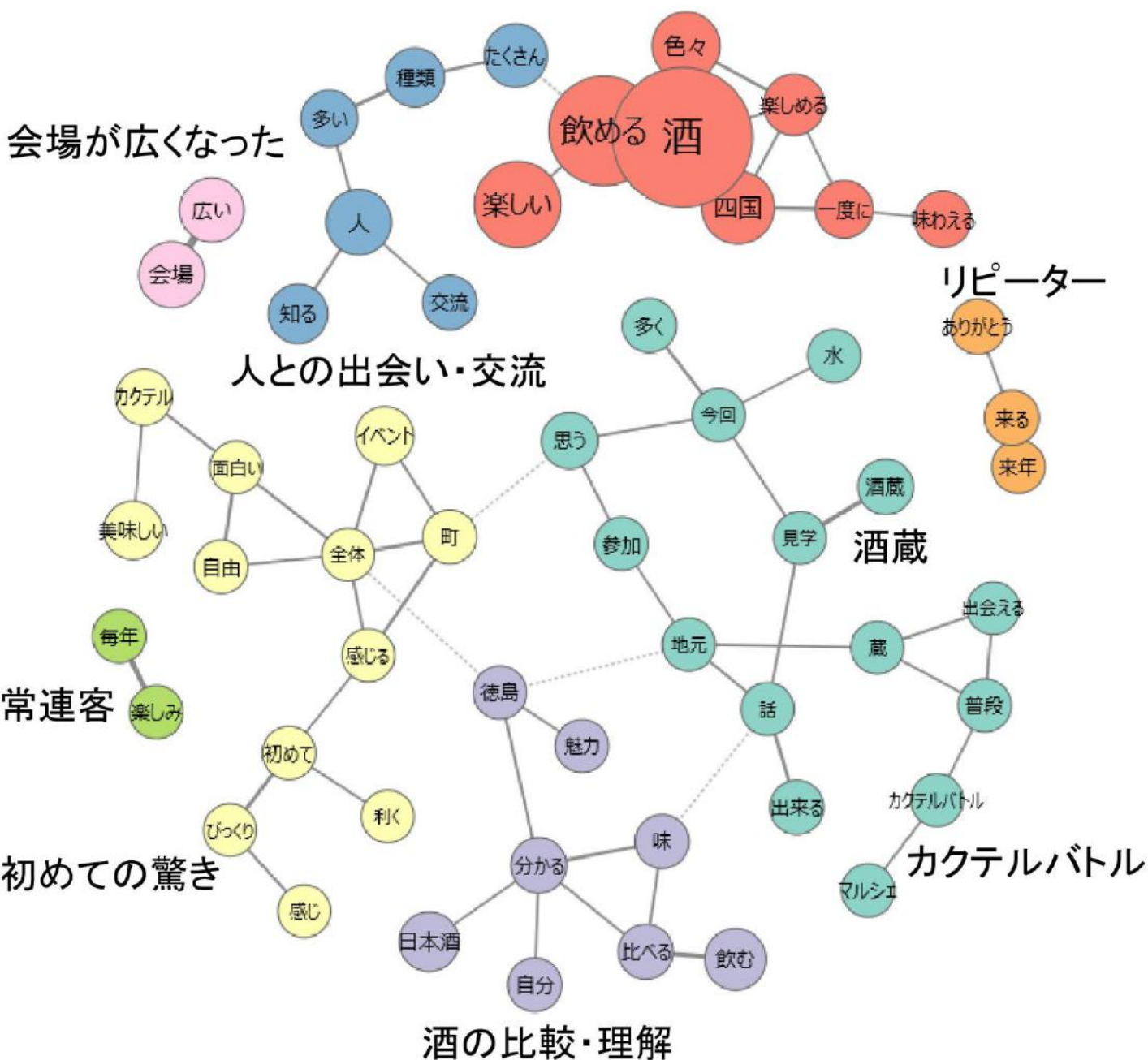
「四国酒まつり」における、インタビュー調査では、実際に学生が、「四国酒まつり」会場において客にインタビューすることにより、地域におけるイベントの成功事例を、身を持って体験し、なぜ成功しているのか？ということを考えさせることにより、地域再生に係るコミュニケーション能力や洞察力の修得を促した。また、学生が空港ビル職員のアドバイスを受けながら自分たちで考えてパネルを徳島空港に設置・展示することにより、自分たちの活動内容をいかにすれば効果的に県民やビジネス客に伝えることができるのかを学習した。

## 課題及び今後の展望

「四国酒まつり」の主催者である阿波池田商工会議所(四国酒まつり実行委員会)や西部県民局、三好市等へ調査結果を発表することにより、「四国酒まつり」の魅力、改善点、マーケティングなどの点において、さらなる改善を提案し、来年度の「四国酒まつり」をより良いものへ変えていくことにより、地域活性化を推進する。

平成26年度 酒まつりアンケート解析結果③  
 自由記述【酒まつりの魅力について】(回答者数701名)

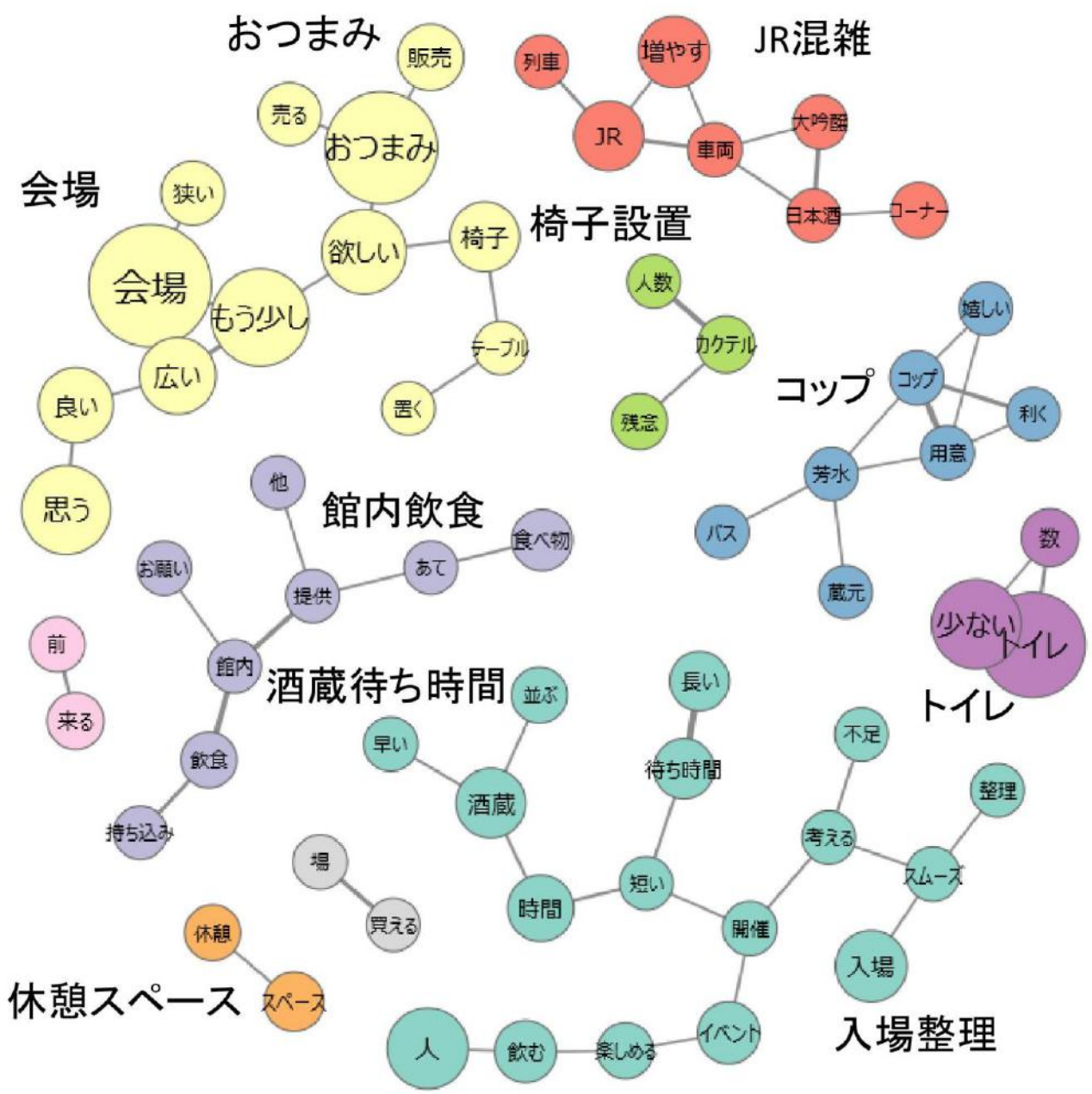
色々な酒を一度に飲める楽しみ



5回以上使用されたワードのみ抽出

Analyzed by KH-Coder2.00

平成26年度 酒まつりアンケート解析結果④  
 自由記述【今後改善すべき点について】(回答者数629名)



5回以上使用されたワードのみ抽出

Analyzed by KH-Coder2.00

## 活動テーマ

### 過疎(中山間)地域の医療・福祉を担う人材の 循環形成への取り組み ①地域医療福祉のニード調査

## 活動の概要

本調査研究は、平成27年度COC応募事業「過疎化が進む徳島県西部地区の医療・福祉を担う次世代の人材育成-看護学部生によるキッズナースの育成-」のための事前調査研究である。本調査研究では、高齢化、若年人口の減少、過疎化が深刻な徳島県高齢者保健福祉圏西部Ⅰ(美馬市、つるぎ町)、西部Ⅱ(三好市、東みよし町)「以下、西部Ⅰ・Ⅱとする」地域の医療福祉に携わる看護職の地域社会や仕事に対する考え方を調査した。

代表者名 : 橋本 茂 (看護学部 看護学科 教授)  
活動メンバー: 小川佳代(看護学部 看護学科 教授)  
中澤京子, 横関恵美子, 江口美希(看護学部 看護学科 助教)  
連携先名 : つるぎ町立半田病院実施場所  
: つるぎ町立半田病院,  
: 健生病院西部診療所併設訪問看護ステーション  
: 健生病院西部診療所山城訪問看護ステーション

## 活動期間/スケジュール

平成26年11月 ~ 27年1月 事前調査  
平成27年 1月 研究説明と参加依頼  
平成27年 2月 つるぎ町立半田病院アンケート調査依頼  
アンケート調査用紙回収  
平成27年 3月 健生病院西部診療所訪問看護ステーション聞き取り調査  
健生病院西部診療所山城訪問看護ステーション聞き取り調査

## 実施した活動内容

地域中核病院でのアンケート調査では

1. 看護職としての成長や能力開発、経済的報酬は9割以上が重要である。
2. 8割が組織や社会的に貢献することは重要である。
3. 6割がその実感は無い。
4. 同僚への配慮は5割以上が重要でない。
5. 8割の看護職が社会的評価は重要で無い。
6. 若い看護師が少ない。20代の看護師は20%である。
7. 定員を満たしていない。

訪問看護ステーションでの聞き取り調査では

1. 平均年齢47.8歳(20歳代を除くと50.5歳)と高い。
2. 地域の訪問看護ステーションが閉鎖でなく職員不足により休止となっている。
3. 対象者は80歳代が多い。女性が8割近くである。
4. 80歳代以上は死ぬまで地域で生活したいという要望が強い。
5. お年寄り同士お互いが気を遣い繋がりが少なくなっている。我慢している。
6. 認知症や身体的原因で出ていくかその土地で亡くなるかである。
7. 部落が消滅している。
8. 受持つ範囲は中学校区であるが、若い人がいないため統合されて結局かなり広い地域を受持たざるを得なくなっている。
9. 自分たちの子供は殆どが地域から出ていっている。

という人材不足や過疎、若い人の流出という、より本調査研究の前提仮説がより厳しい現実として明らかになった。

## 学生のレポート

本調査はキッズナース事業の予備調査であるため学生は未だ参加していない

## 学外協力者レポート

徳島県西部地区の人口過疎化はもう止められない状況になっている。

訪問看護師の意見は

- ・ 対象者さん宅へは遠いところで車で40分以上かかる。距離よりも時間で考えている。
- ・ 台風などがある道路が崩れて訪問できないことも良くある。
- ・ 対象者さんの減少よりも、ヘルパーさんや看護師の減少が顕著で在宅を支えきれなくなっている。
- ・ 職員不足で訪問看護ステーションの休止を余儀なくされている施設もある
- ・ 老老介護が支えられなくなると地域でいなくなる。
- ・ 近所に迷惑がかかるとお互いに木を遣って、次第に疎遠になっている
- ・ 体力の限界を感じる。特に身体面、腰痛とか……
- ・ 冬になると厳しいので若い人は香川の方によくいっています。
- ・ 地元にもいい病院があると思うのやけど地元の人あまり残らない……
- ・ 政治がもっとしっかりしてほしいやけど暗い話ばかりで
- ・ 子供たちも地元を好きになるようにアピールしないとどんどん出ていってしまいます
- ・ 地元の診療所も閉鎖になっています。医師が居なくなっています。  
等、過疎化の現実を避けて通れない状況になっている。そして過疎地の医療福祉を支える看護師のジレンマを切々と訴えている。

## 活動成果

活動内容で述べたが、人材不足や過疎、若い人の流出という、本調査研究の前提仮説がより厳しい現実として明らかになった。

この結果を踏まえ、平成27年度研究事業「過疎化が進む徳島県西部地区の医療・福祉を担う次世代の人材育成－看護学部生によるキッズナースの育成－」に取り組み、地域創生の観点から地域の人材で地域の医療・福祉を賄う方策を講じる必要がある。

将来地域で医療福祉を担う、地域の人材(子どもたち)を対象とした医療・福祉への関心を引き出すキッズナース事業を展開したい。

そして、キッズナース事業の対象の家族に地域に魅力的な職場があることへの認識の程度や、地域の医療・福祉への関心度等を調査し、更なる方策を検討し、持続的な地域人材の循環を目指したい。また、このプロセスの中で本学の役割についても調査、検討する情報が得られた。

## 課題及び今後の展望

今回の研究調査結果を踏まえて、H27年度COC事業である、次世代の地域医療福祉を担う人材育成の一つの試みとして本学学部生による小学生対象のキッズナース事業を計画する

※キッズナース事業とは

四国大学看護学部が、地域の中核病院と連携し、中核病院近辺の小学生を対象として当学に引き、看護学部生によるキッズナース授業を実施する。その後、地域の中核病院を医療者の立場から見学していただき医療・看護に興味を持っていただく。このプロセスの中で将来、地域で医療福祉に貢献できる人材の育成と地域医療福祉は地元の人材で賄う人材の循環を目指す事業である。



## 活動テーマ

地域創生のための  
地域社会企業家育成システムの構築

## 活動の概要

地域社会企業家育成システムの構築のための「韓・日村おこし運動の比較研究の資料収集」

代表者名 : 姜 判国 (経営情報学部, 経営情報学科, 教授)

連携先名地域名や団体名など

韓国・ソウル国会図書館、セマオル運動本部、清道(セマオル発生地)

実施場所

韓国・ソウル国会図書館、セマオル運動本部、清道(セマオル発生地)

## 活動期間／スケジュール

平成26年12月25日(木)～12月29日(月)

訪問インタビュー及び資料収集を実施

平成27年2月23日(月)～2月26日(木)

経済学共同学会大会 韓日経商学会研究大会(延世大学)で  
研究論文「韓日村おこし運動の比較研究」の研究発表

グローバル化とICT化が急速に進展する中で農村、地方都市の若い労働人口の大都市に流出によって、農村社会の少子・高齢化はより一層深刻な社会問題で現れている。

それが地方都市商店街、産業の衰退化が促進させているなか、それに加え農村地域はさらにTPPのツナミが押し寄せて危機的な状況に置かれていることが韓日両国農村の共同した課題であることを認識した。それで本研究では地域活性化に成功した韓日両国の事例を調査し比較研究を行いその結果を学会で発表も行った。

## 実施した活動内容

韓・日村おこし運動の比較研究の資料収集

本稿は両国の地域活性化運動の事例を断面積考察、比較検討することでその運動の拡散過程の特徴と運動の解決しなければならない課題は何なのかを検討するための資料調査を行った。

## 課題及び今後の展望

地域活性化の課題は、責任ある指導者の発掘育成が何よりも重要で緊急な課題であろう。地域社会のリーダーは、地域社会の問題をより客観的観点で観察して革新的な問題解決方法論を提示して住民たちの自発的参加を引き出せることが何よりも重要な課題であろう

韓国の場合、このようなリーダー発掘育成を行うためにセマオル運動中央研修院が設立され、行政の後押しで、リーダーの精神教育、課題解決方法、成功的事例の紹介などの基本的な教育を持続的に行っている。日本の場合、地域社会問題の解決には地域自治体が主体となり取り組むか、NPOなどの自発的組織やリーダーの出現に期待している。それで地域活性化事業は散発的であり、地域的に成りがちで地域によりその格差が大きく現れているし、また、地域の自治体に任せていては持続的でない面がある。

活動の概要

- 動物実験によって、食用藍の機能性成分の効果を確認し、やその成分分析を行った。
- 食用藍粉末を用いて、パウンドケーキを作成した。学内教職員、学生を対象として試食アンケートを実施、さらに、日曜市においても一般市民を対象として試食アンケートの結果から人気があったレシピを決定し、芳藍祭で販売し、好評を得た。

代表者名：近藤 真紀 (生活科学部 管理栄養士養成課程 教授)

活動メンバー：辻 博子 (生活科学部 管理栄養士養成課程 助教)

森脇崇弘, 小谷 航(管理栄養士養成課程3年生代表, 1~3年生)

連携先名：(株)ボン・アーム 三谷芳広氏

徳島県農林水産総合技術支援センター 村井 恒治氏

実施場所：四国大学(徳島市応神町古川字戎子野123-1)

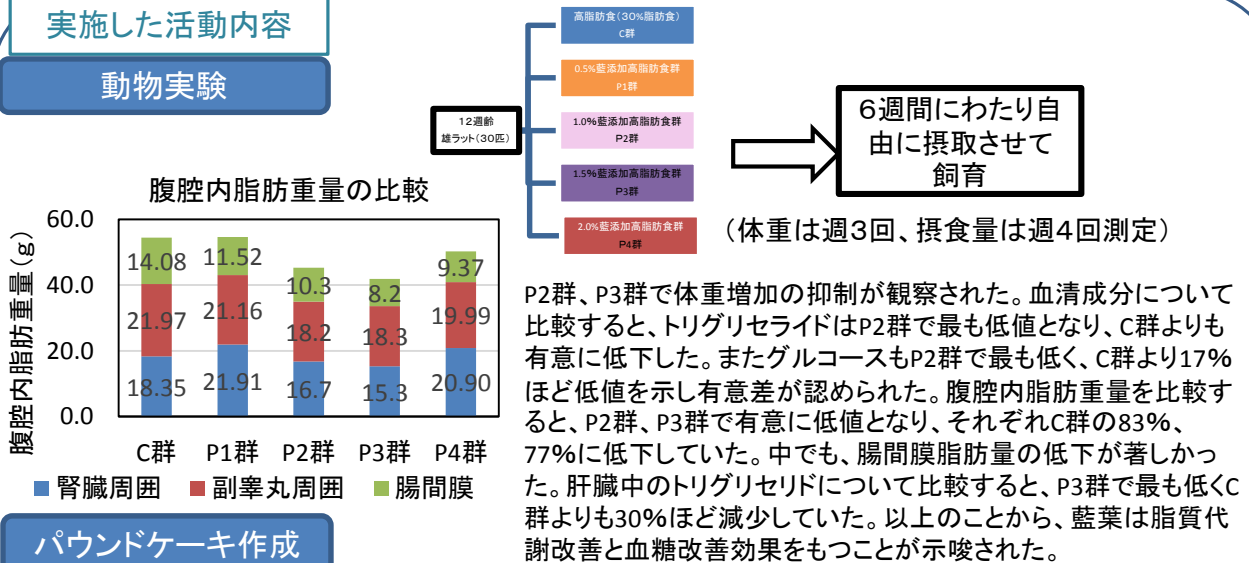
活動期間/スケジュール

平成26年 4月 ~ 27年12月 動物実験(血清成分分析, 藍葉粉末成分分析等)

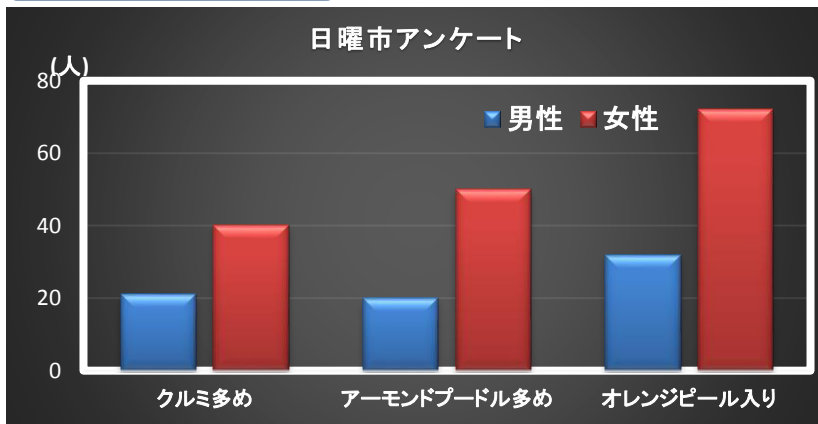
平成26年12月 ~ 27年10月 パウンドケーキ試作, 事前調査

実施した活動内容

動物実験



パウンドケーキ作成



学内アンケート(教職員、学生)、日曜市ともに藍葉にオレンジピールを加えたものが最も好まれた。平成27年度芳藍祭では藍のパウンドケーキの人気は高く、予定の数量を上回った。



生活科学科4年 南佳江さんのデザイン

課題及び今後の展望

徳島県の活性化に貢献できるよう、藍の機能性に関する研究をさらに進める予定である。また食用藍の利用について、さらに検討したい。

## 活動テーマ

地域の就学前児童への読み聞かせプロジェクト

## 活動の概要

パペットシアターや絵本と音楽を組み合わせ、リラックスした雰囲気の中で地域の児童に英語に触れる機会を与えるプロジェクトです。

代表者名：スザンネ バログ（文学部 国際文化学科 准教授）

活動メンバー：田中 裕子（生活科学部 児童学科 准教授） 専門ゼミナールメンバー

実施場所：四国大学L館3階・ワールドプラザ

## 活動期間／スケジュール

平成27年6月 わくわくイングリッシュゼミナー Performance (World Plaza)

平成27年10月29日(土) Halloween Event (World Plaza)

平成27年11月13日(日) Horansai 英語で遊ぼう (World Plaza)

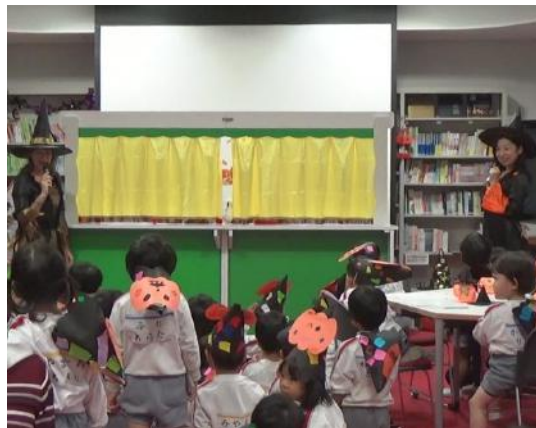
## 実施した活動内容

### 1. 6月わくわくイングリッシュゼミナー Performance (World Plaza)



## 実施した活動内容

### 2.Halloween Event 10月29日 (World Plaza)



## 活動成果

わくわくイングリッシュゼミナーは高校生を対象としたイベントで、本プログラムとして初めて参加したが、参加者に英語の新しいプレゼンテーション方法として興味をもって鑑賞してもらえたと考えている。

また、附属幼稚園園児を招いての開催となったHalloween Eventでは、学生による既存のパペットへの工夫などで新たなストーリーに対応し、学生間のコミュニケーション能力の向上に有効であったとともに、園児の反応も好評であったことは、主目的である就学前児童にリラックスした外国語に触れる環境を与えることを達成できたとともに、学生にもその達成感が感じられたものと考えている。

## 課題及び今後の展望

平成27年中の活動はWorld Plazaを中心にしたものとなり、パペットシアターの検索が中心となった。音楽との本格的なコラボレーションは2月に実施予定のバルンコンサートで実施を予定している。

音楽の導入とともに、背景の切替のためにプロジェクタの利用を検討していたが、わくわくイングリッシュゼミナーで利用した短焦点プロジェクタは、通常のプロジェクタと異なり、人形に投影することなく背景のみに投影できるため、今後導入を検討していきたいと思っている。

## 活動テーマ

避難シュミレーション等を通じた、ボランティアコーディネーター育成プロジェクト

## 活動の概要

南海トラフ地震に備え、学生ボランティアコーディネーターと地域の住民組織と協働で、避難ビル指定を受けている大学の校舎を使って、1泊2日の避難訓練を実施し、災害時学生ができる災害ボランティア活動や学生コーディネーターのあり方を検討した。

代表者名:フェネリー マーク (文学部 国際文化学科 准教授)

活動メンバー:日開野 博(短期大学部 教授) 四国大学学生ボランティア支援室スタッフ

連携先名:徳島市社会福祉協議会、応神町コミュニティ協議会・公民館・応神地区自主防災  
連合会・災害ボランティア団体ホワイトベース等

実施場所:四国大学中央棟(A館)

## 活動期間/スケジュール

平成27年9月5日(土)~6日(日)

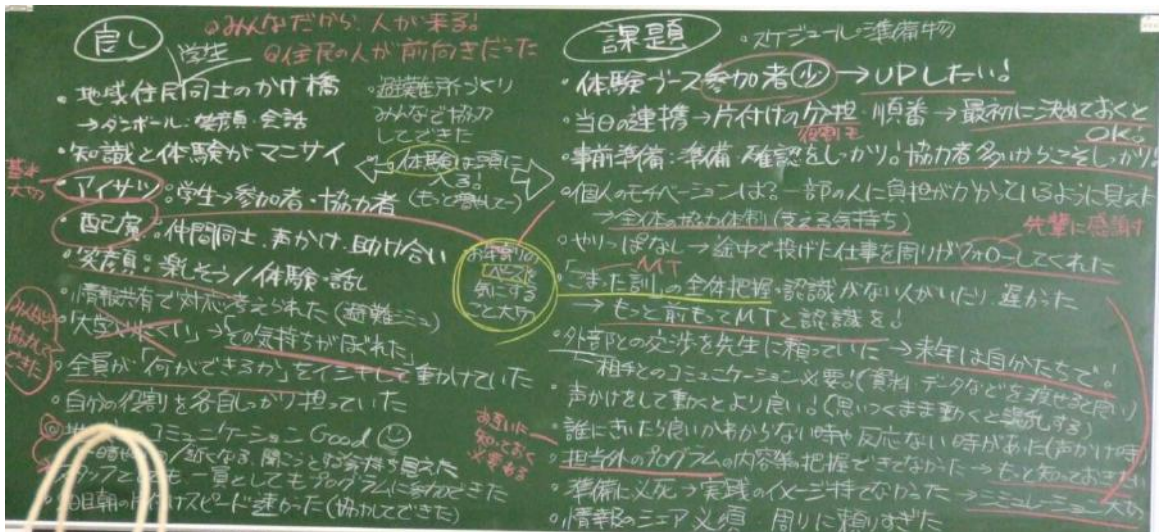
こまった訓・応神地区住民避難シュミレーション in 四国大学 開催

## 実施した活動内容

約85名(学生25名・地域住民50名・関係スタッフ10名)の参加のもと開始した。

初日は13:00に南海トラフ巨大地震が発生したと想定し、大学周辺の地域住民と学生が避難シュミレーションゲーム(要援護者の人々を想定して支え合いながらの避難)訓練(四国大学中央棟3階までの避難・津波避難ビル指定)を実施した。

その後は、1階ロビーで学生ボランティア支援室の学生スタッフ主導のもと、避難してきた地域住民の方々と参加した学生も含めダンボールによる避難所づくりをして、37名(学生20名・住民7名・関係者10名)がその夜、救援物資の食料(カップラーメン・避難食ご飯)で一夜を過ごす体験をした。翌日はミニ防災展と題して、すぐ役立つ防災の知恵(クイズ方式での避難袋づくり)と技術等を住民と学生が一緒になって防災体験展示会を開催した。



## 学生のレポート

初日のダンボールによる避難所作りは、3つのグループに分かれ、一つの家族を想定しての避難所づくりでありました。具体的には、寝床(寝室)・居間・ちゃぶ台・下駄箱・更衣室・個人荷物入れ・玄関出入り口等それぞれに住民と学生が協力し創意工夫して、ダンボールだけで素敵な避難御家が出来上がりました。その製作した避難御家で(中央棟ロビー・A館1階)一夜を過ごしました。

翌日は学生と応神町内の宿泊した住民の皆さんとともに6時半に起床し、NHKラジオ体操から始まり、ミニ防災展と題して、すぐ役立つ防災の知恵と技術等を住民と学生が一緒になって防災体験展示会を開催いたしました。内容は、ロープワーク・タンカづくり・消火訓練(徳島東消防署)・AED体験指導(日赤徳島支部)・災害情報通信と電話(NTT)・避難食作り(応神地区日赤奉仕団)など体験し防災意識を高めました。特に「避難食づくり」は、応神地区日赤奉仕団のボランティアの皆様方の支援で昼食のお米の炊き出しを行い、救援物資(大塚ボンカレー)で昼食を参加者全員でいただきました。また、水がないときの場合を考えて、炊き出しの色々な水分(クリスタルガイザー水・オレンジジュース・牛乳・カフェオーレ・ポカリスエット・コーラ・炭酸ジュース)でお米を炊いて味見してみました。



## 活動成果



以下のような点で変化がみられた。

- ・ 学生たちの活動(学生のコーディネーター力、提案力、企画力、調整力、実践力、発見力、住民とのコミュニケーション力・支援力)
- ・ 防災意識の高揚、実践力、提案力(災害時要援護者への配慮—(気づき力)
- ・ 学生の想い(感想)—支援力を含め防災知識・技術・避難所運営等、防災学習・教育の指導への自信
- ・ 住民意識—住民のマナー化した避難訓練からの逸脱、世代を超えての防災意識の高まり。大学と近隣地域(町内会)とつながりが親密になった。災害時は大学の若い学生を頼りにしたい。安心した。

## 課題及び今後の展望

学生の主体的な災害ボランティア支援活動を継続させていくためにも、学生Vコーディネーターに対し、災害に対する問題意識を一つひとつ具体的に実践につなげていくことが重要であり、実践可能な内容を企画するために「問題意識と情報収集調査分析や調整力へのネットワーク支援」の環境整備が求められる。

一方、調整力とあわせ、避難してきた住民への支援と防災知識・技術・知恵を学生ボランティア・コーディネータースタッフ自身が深く主体的に学習し、伝達(指導)力を身につけることが重要であり、今回も学生スタッフは、事前研修を県立防災センター職員から3回に分けて学び体得して(避難袋の確認や袋作り、紙食器づくり、避難食づくり、避難所づくり等)、訓練本番に臨んでいる。

もうすでに今後の活動計画が始まっているが活動の展開・参加者の増加が今後の課題となっている。

## 活動テーマ

地域の企業・経済団体および電子商取引企業と協力した  
電子商取引教育環境の構築に関する研究

## 活動の概要

メディア情報学科情報システムコース3年時の必修科目である「システムプロジェクト演習」のカリキュラムを、地域のビジネスへの貢献を意識したことにより、実践的な内容とするために、徳島県中小企業家同友会の協力の下、電子商取引を課題とした教育環境を構築する研究を行った。本授業を通じて、電子商取引サイトの構築、マーケティングの意志決定、サイトの管理運営ができる人材を育成することを目標とした。

代表者名：尾崎 圭司（経営情報学部 メディア情報学科 教授）

活動メンバー：辻岡 卓（経営情報学部 メディア情報学科 准教授）、  
戸川 聡（情報処理教育センター 准教授）

連携先名：徳島県中小企業家同友会

実施場所：四国大学

## 活動期間／スケジュール

平成27年 4月 ～ 平成27年 9月 事前調査

平成27年10月 ～ 平成27年12月 打合せ

平成27年10月 ～ 平成27年 1月 システムプロジェクト演習

## 実施した活動内容

電子商取引の概要・電子商取引サイトの比較分析・アクセス分析の手法・Web アクセシビリティ等について学習するとともに、「しこぽん」販売サイトの構築課題に取り組んだ。

- (1) 電子商取引サイトの比較分析  
各自で分析したサイトについて、ブレインストーミングを行って、グループ毎に検討する。



- (2) 「しこぽん」販売サイトの構築課題  
電子商取引サイトの分析経験を生かして、課題の「しこぽん」販売サイトを効果的に構築する。

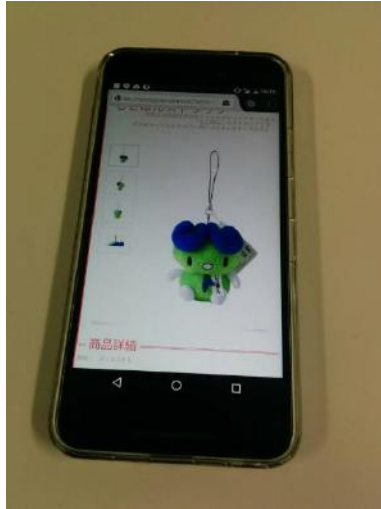


## 実施した活動内容

### (3) 構築した「しこぽん」販売サイトの例



タブレット端末での表示例



モバイル端末での表示例



モバイル端末での購入手続き例

(4) 経営者と現場担当者による電子商取引に関する講演会をより効果的にするために、対象企業の電子商取引サイトを予め調査研究し、質問事項をまとめた。まとめた内容はグループ毎に議論して検討した。

## 活動成果

本研究は初年度だったので、情報システムコース学生対象の「システムプロジェクト演習」としては、電子商取引のあらゆる分野を盛り込んだ内容となってしまった。それでも、多くの学生が積極的に課題に取り組んでくれたのは、前年度までと違ってより実践的な内容だったからだと考えられる。

## 課題及び今後の展望

来年度からは、学科のカリキュラム改革によりeビジネスコースができるので、電子商取引のマーケティングとビジネス上の管理は当該コースに任せ、情報システムコースの「システムプロジェクト演習」としては電子商取引サイトの構築・システム管理に絞り、より高度な内容、特にモバイル端末を積極的に使用した電子商取引サイトの構築と管理に取り組みたいと思う。

電子商取引企業との交渉には時間がかかることが判明したので、本年度は地元企業と大学との2者関係の構築に注力した。電子商取引企業との協力関係の構築は今後の課題である。



## 活動の概要

生活科学科では平成26年度、勝浦町、美馬市、みよし市、美波町、徳島阿波おどり空港などの様々な地域や場所で活動を行っており、それぞれの拠点において人脈の形成や初期データの収集などの成果が得られ始めている。これまで行ってきた幾つかの「点」の教育・研究活動をつなげ「線」とし、活用可能な生活科学分野を基盤とした体験型の地域貢献型人材育成カリキュラムの開発を目指す。

代表者名 : 中岡 泰子 (生活科学部 生活科学科 教授)

活動メンバー : 坂野 美恵子 (生活科学部 生活科学科 教授)  
服部 大輔 (生活科学部 生活科学科 准教授)

連携先名 : 美馬市商工観光課, 四国旅客鉄道(株) 総合企画本部地域連携室

実施場所 : 徳島県美馬市大滝山周辺, 徳島県勝浦郡勝浦町

## 活動期間/スケジュール

## ①美馬市広棚地区/大谷地区における芝桜祭りPR

芝桜祭りに関して情報発信による若者呼び込みや地域体験学習の提案を行う。

- 平成27年 4月 美馬市芝桜祭り来訪者アンケート調査  
6月 桜祭り来訪者アンケート調査結果報告及び意見交換会 (於: 美村が丘)  
9月~ 2016年広棚芝桜祭りポスター制作  
9月 美馬市大滝山周辺におけるフィールドワーク  
10月 大滝山周辺フィールドワークの実施結果報告及び意見交換会 (於: 美村が丘)

## ②勝浦町における地域資源発掘・PR

勝浦町で開催されている催しに学生が参加し、それらの魅力を取材するとともに冊子の作成やイベントにおける制作活動を行う。

- 平成27年10月 勝浦町さかもと「あかりの里」行灯制作・設置・ボランティア体験  
11月~ 勝浦町「さかもとウォーキングMAP」制作活動

## ③勝浦町におけるミカン農家収穫体験

高齢化により収穫や出荷が困難なみかん農家を学生が支援する。

- 平成27年11月~ 勝浦町みかん収穫ボランティア活動(3日間)

## 実施した活動内容

以下の活動について、延べ59名の学生(生活科学科1~4年生)がボランティア体験・調査活動に参加した。

- |                         |     |
|-------------------------|-----|
| ① 美馬市芝桜祭り来訪者アンケート調査・発表  | 3名  |
| ② 美馬市大滝山周辺におけるフィールドワーク  | 15名 |
| ③ 勝浦町さかもと「あかりの里」行灯制作・設置 | 20名 |
| ④ 勝浦町「さかもとウォーキングMAP」制作  | 1名  |
| ⑤ 勝浦町みかん収穫ボランティア体験      | 20名 |



芝桜祭り来訪者アンケート調査(4月19日)



美馬市大滝山周辺における  
フィールドワーク(9月16日)



勝浦町あかりの里行灯制作  
(10月13日及び14日)



みかん収穫ボランティア体験  
(11月24日, 12月4日及び20日)

## 学生のレポート

### ○ 美馬市での活動に参加した学生コメント

地域を盛り上げるために多くの人が活動していること、今まで知らなかった大滝山周辺の魅力を知ることができた。地域住民にとっては当たり前のことでも、他の地域の人から見れば十分な魅力になることが分かり、外からの視点で見ることの必要性を感じた。他の地域にはない、素晴らしい景色や自然、地域独特の料理や文化に触れたこと、おもてなしをして下さった地域の皆さんと交流したことで、もっと多くの人にこの地域を知って欲しいと思うようになった。この地域の魅力をより知ってもらうためには、地域住民が個々に行っている活動をつなげる仕組みが必要であろう。また、自分のように大学など学校などの機関や組織を通して一度訪れる機会を作ること重要であると思われる。「広棚芝桜祭りのポスター」の制作をさせてもらったことは大変貴重な体験であった。2016年広棚芝桜祭りポスター



学生が制作した  
○ 勝浦町での活動に参加した学生コメント

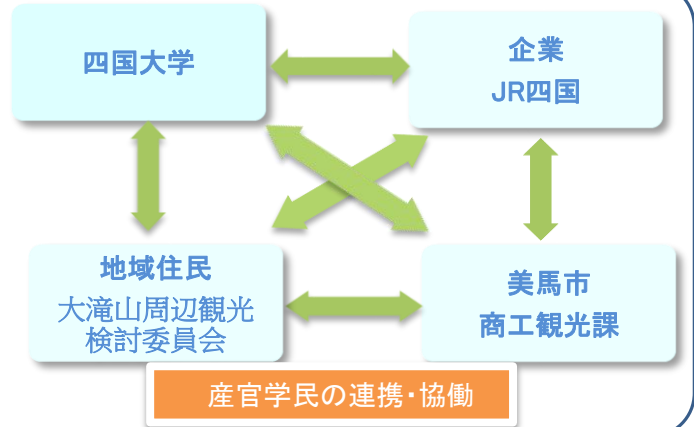
みかん収穫ボランティアに参加し、今の状況では農家だけによる経営で持続していくのは困難だと感じた。しかし、農業は食生活と深く関わっており、私たちは農業の意味や価値を理解する必要がある。そのきっかけとして援農ボランティアの活動には農業の新しい可能性があると思われる。今後、各地域で行われる援農ボランティアに学生が参加し、農業やその地域に興味をもって関わることで、農業や地域の活性化に繋がると思われる。また、学生もボランティアに参加することで、満足感や喜び、やりがいを感じられ、農家の方との触れ合いの中で成長できる良い機会になると感じた。

## 学外協力者レポート

学生が美馬市広棚地区で実施した「芝桜祭りアンケート調査」の報告の中で、改善点として駐車場問題を発表した。これを踏まえて、2016年の芝桜祭りでは、美馬市が会場までの臨時バスを出すことが検討されるようになった。

また、学生が参加した美馬市大滝山周辺におけるフィールドワークの意見をもとに、現在、JR四国が観光ツアーの開発やこの地域の観光マップを作成している。

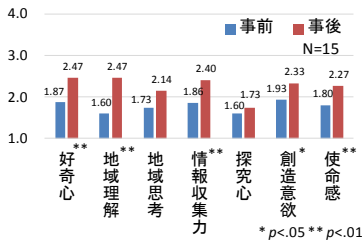
産官学民の連携・協働をさらにすすめていきたい。



## 活動成果

右図は、美馬市大滝山周辺におけるフィールドワークに参加した学生のルーブリック自己評価である。参加後「好奇心」、「地域理解」、「情報収集力」、「創造意欲」、「使命感」が有意に向上した。

また、本活動の一部は徳島新聞に記載され紹介された。



ルーブリック評価結果



徳島新聞記事  
(9月22日掲載)

## 課題及び今後の展望

学生の地域での活動が紹介される中で、例えば、右図は今回学生が作成したマップであるが、他の地区からも作成依頼が届いている。問題解決学である生活科学の専門性を活かせる場面は多いと考えている。



学生が制作した  
「さかもとウォーキングMAP」

本研究は、あくまでカリキュラムの作成が最終目標であるが、実際に現場に入り地域に貢献する活動及び地域貢献型人材の育成を目指すものである。そのためには、教材内容や教育効果の測定についてさらに検討し、より効果的な成果をあげることのできる仕組みづくりを目指す必要がある。

## 活動テーマ

舞台表現をベースとした地域活性化人材育成プログラムの  
開発に関する研究

## 活動の概要

北島町に古くから伝承されている源九郎狸を町の新たな名物として活かし、北島町の交流人口増加につなげるプロジェクト(北島町商工会)に協力するなかで、まず源九郎ダンス「ひょうたん島の源九郎」の制作(ダンス振付け・衣装デザイン考案)を行った。その後、北島ケーブルテレビとの協働で、北島町内外に周知するためのPV制作を企画し、それを実行(狸に扮して15箇所の撮影場所に出発し、町民にダンス指導しながら一緒に踊る姿を収録し編集)した。また、平成27年11月8日開催の第2回北島町ばけ～る(DMCMフェスタ)において、源九郎ダンスを披露する創作ダンス劇を発表し、PVのお披露目を行った。また今後も、北島町内外で源九郎ダンスの指導や広報活動を継続して町の活性化に貢献する。

代表者名 : 田村典子 (生活科学部 児童学科 教授)  
活動メンバー : 宇山穂乃香、尾崎理都、大和佑衣、湯浅紋、横山亜希子、吉田満咲 (生活科学部 児童学科 4年生6名) 阿部千里、大塚麗華、小島加奈、高岡秋生、  
近久莉香、堤咲子、松長美佑 (生活科学部 児童学科 3年生7名)  
連携先名 : 北島町商工会、キューテレビ(地元ケーブルテレビ)  
実施場所 : 徳島県板野郡北島町内

## 活動期間／スケジュール

平成27年4月 ～ 5月

- ・ 第1回打合せ (四国大学生、北島町商工会、地元ケーブルテレビ顔合わせ)
- ・ 第2回打合せ (撮影日程、撮影施設・場所の検討と撮影依頼等計画)

平成27年6月 ～ 8月

- ・ 第1回撮影 (北島町商工会、ステッチハウス絆デイサービス)
- ・ 第2回撮影 (Hair BIVRE 北島店)
- ・ 第3回撮影 (ふく利、昭月堂、TUTAYA、狸銅像前)
- ・ 第3回撮影 (板東東消防組合)
- ・ 第4回撮影 (北島町役場、北島北公園総合体育館／コーラス・卓球)
- ・ 第5回撮影 (フジグラン北島)
- ・ 第6回撮影 (みどり保育園)
- ・ 第7回撮影 (北島小学校)
- ・ 第8回撮影 (大鵬薬品工業(株)北島工場遊歩道)

平成27年10月

- ・ 第3回打合せ (DMCMフェスタについて内容の検討等)

平成27年11月

- ・ 輝く女性応援フェスティバルにて「源九郎狸活動による町の活性化をプレゼン」
- ・ DMCMフェスタにて北島町のヒーロー、源九郎狸ダンス劇「ひょうたん島の源九郎」を披露



北島町商工会、北島ケーブルTV、田村ゼミの3者でPV制作についての打合せ。  
(日時: 2015.5.29 場所: 北島町商工会)



ダンス指導とPV制作のための撮影  
(日時: 2015.6.25 場所: 板野東消防組合)



ダンス指導とPV制作のための撮影  
(日時: 2015.7.14 場所: 北島小学校)



「DMCM(ダムコム)フェスタ(第2回きただじままるしえ)」で、源九郎に扮して開場を歩きイベントを盛り上げるとともに源九郎の創作ダンス劇を披露する。  
(日時: 2015.11.7 場所: 水辺プラザ)

私たちは源九郎ダンスを通して、北島町の地域貢献事業に参画した。田村典子先生が創作した「源九郎ダンス」の指導技術を学び、源九郎をイメージして考案制作した狸衣装を身に付けて地域の方々とふれあいながら源九郎ダンスを披露してきた。ダンス指導することで多くの方々を笑顔にでき、北島町の新しい名物「源九郎狸」の町内外への発信が可能だったと思う。

身体を踊らせながらの触れ合いは、初めて知り合った人ともすぐに心を通わせることができる。このことにより、「源九郎ダンス」で人々の心を一つにして町の活性化のために一役を担う活動は、楽しさや喜びを感じられる大変有意義な体験になり、今後も続けていく必要性を感じている。また、源九郎ダンスのPV撮影は、企画から行い、各施設でどのような源九郎狸を描くかのシナリオ決定に多くの時間を要した。ただ、設定しすぎたために現場での乗りが悪くなり、撮影に支障をきたすこともあった。同じダンスでも角度を変えて撮りなおしをしなければならぬシーンが何度か発生したが、これも大変勉強になった。撮影の季節は、6月から8月であり暑い日が続いたが、老若男女の町民の方々に誠心誠意でダンス指導を行うことに努めた。その結果がPVに纏められ、学生が制作した源九郎ダンスの振り付け説明書も使用してくださった。私たちは、このたびの北島町地域活性化参画活動によって、北島町商工会、そして地域の皆さんとの関係がとて深くなった気がしている。社会人の方々と共に企画を練り、活動を進めることは、私たち学生が地域社会のシステム等を知ることにも繋がり、大きな学びと喜びになった。今後、大いにに生かしたいと考える。

### 学外協力者レポート

#### ■道上幸将さん(北島町商工会経営指導員)

平成27年度は四国大学生生活科学部児童学科田村ゼミとの協同により、北島町内15ヶ所を巡り、源九郎ダンスプロモーション動画を撮影、また、平成27年11月8日(日)開催の「第2回北島町ばけ～る(DMCMフェスタ)」への出演を通じてダンス普及活動を行った。プロモーション動画はDVDとして、町内小・中学校等に配布するとともに、YouTubeにアップロードし一般公開している。また、取組自体を徳島新聞にも大きく掲載していただいた。

これらの活動から、地元ケーブルテレビの番組として取り上げられ、また、動画を見た香川県のイベント事務局からも問い合わせがくるなど、北島町内はもちろん町外においても認知度は上昇している。平成28年度は地元ケーブルテレビとタイアップし、ケーブルテレビのプログラムとして番組前半を企業PR、番組後半を企業の従業員が源九郎ダンスを行うという地元企業の紹介とダンスの普及という2つの目的をミックスした番組の制作を行いたい。

また、平成27年度中には北島町高房の大鵬薬品工業(株)の敷地の一部に源九郎狸の石像を設置するが、平成28年度からはその石像周辺での伝承普及のためのPRイベントを実施予定である。これらの活動についても、貴学学生の助力をいただきたいと考えている。

貴学学生にとって、今回の活動は、多くの社会人と接する初めての機会であったかも分かりません。しかし、学生と一緒に仕事をさせていただいて、事業の企画段階での発言や実際の撮影現場での言動などから、コミュニケーション力や積極性、実行力、企画力といった、いわゆる“社会人基礎力”が高い学生であるとの印象を受けた。その“社会人基礎力”が高い学生の物事(作業)に取り組む姿勢(ひた向きさ)に関心させられるとともに、出されるアイデアも固定概念がない分、考え方が非常に斬新的であり、かつ、画期的な意見を出すことがあり我々にとっても良い刺激となった。

#### ■大森正行さん(キューテレビ(CUE)/放送・制作課 課長)

学生達のダンスやパフォーマンスは、各撮影場所に合わせたイメージで構成した。演じる学生達は、表情豊かに生き生きと躍動的だったことで、それに魅せられた子どもたちやお年寄りのいい表情を撮影することができた。また編集には、源九郎たぬきが町民を笑顔にしていくというイメージを表現したいと学生達が積極的に関わってくれ、彼らの「ものづくり」に対する熱い想いが伝わり楽しい仕事となった。

今後は、地域に伝わる「源九郎たぬき」の話を多くの人に知ってもらうためにも、番組制作という形で継続していきたい。

## 活動成果

北島町の地域活性化や交流人口の増加を目標に、北島町商工会のプロジェクトに参画し、① 地域の方々とふれあひながら源九郎ダンス指導、② 今後の広報につなげる源九郎ダンスのPV制作の活動、③ 北島DMCMフェスタに出演して源九郎ダンス創作劇を披露してイベントを盛り上げる、という大きな3つの目的を達成させた。成果として考えられることは、「源九郎ダンス」の指導を通じて行った地域の方々との交流により、みなさんを笑顔にすることができたこと。また学生達はこのことに喜びを感じており、コミュニケーション術としてのダンスの力を再確認するとともに、学生自身の指導力養成も可能になった。

さらに、「源九郎ダンス」によって、北島町商工会が求めていた、『「源九郎狸」を北島町の名物にする』ことができた。そして、平成27年11月8日に開催した、第2回きたじままるしえ(DMCMフェスタ)は、小雨の中ではあったが、北島町のために創作したオリジナルダンス劇「ひょうたん島の源九郎」を披露した。結果、町長や教育長そして会場の皆さんに大変好評であった。ダンス劇の内容は、北島町の源九郎たぬきが町興しをする内容を楽しく演出しており、会場に集まっていた多くの方々には大きな拍手をしながら見ていただけた。FacebookやTwitter、商工会のHPにも、ダンス劇の写真は勿論のこと、「ミュージカルを見ているようで楽しかった」「かっこよかった、面白かった」等のコメントが数多く配信されており、学生達が創作し演じたオリジナルダンス劇「ひょうたん島の源九郎」が、ここでも源九郎狸を北島町の名物として印象づけていた。学生達もダンス劇に対する会場の反応を実感し、達成感と充実感に満ちていた。

また、DMCMフェスタの模擬店では、キューテレビ(CUE)と協働で制作した、「ひょうたん島の源九郎」のPVが配られていた。PV制作の企画、実践を含めて7ヶ月を費やして制作したもので、その中3ヶ月をかけて源九郎ダンスを各施設等に指導巡回して撮影した。その後、心を込めて編集し完成したPVは学生にとって、大きな学びと達成感が詰まったものになった。PVケースの中には、学生の描いた、ダンスの振り付け画をセットしてもらえた。PVは、見てくださった方を必ず笑顔にし、北島町に興味関心を持ってもらえる内容に仕上がっていると確信している。PV制作を通して行った地域活性化に資する人材育成のプログラム開発として良好な結果を残せたと考えている。

## 課題及び今後の展望

今回の活動は、北島町商工会が計画した地域活性化におけるプロジェクトの一部に田村ゼミの3年生7名が協力させていただいたものであり、新しく北島町の名物にしようと考えた「源九郎狸」をテーマにした活動である。ダンス・身体表現活動の研究をしているゼミであることから、「源九郎ダンス」を北島町内外に広めて、北島町を活性化させることを目標に活動した。源九郎ダンスの指導を含めたPV制作活動により、第一段階である源九郎たぬきを知ってもらうということについては結果を出せたと考えている。学生達も社会貢献する楽しさと充実感、そして事業を企画実行する面白さを学ぶことができた。

これからの課題は、「源九郎ダンス」を、北島町地域の方々は勿論、町外や県外にも広報して踊ってもらうことである。そのためには、北島町商工会との連携を継続させるとともに、商工会の方々との関係をますます積極的なものにしなくてはならない。そして考えられることは、今後も北島町で開催されるイベントに参加して、源九郎のオリジナル劇「ひょうたん島の源九郎」を披露し、源九郎ダンスを指導していくことであると考える。既に、県外広報については、高松市から北島商工会に依頼のあった、28年7月30日の「さぬき狸祭り」に参加する予定がある。この依頼は、FacebookやTwitter、商工会のHPで配信された、源九郎狸の楽しそうな活動が、高松市の「さぬき狸祭り」主催者の目にとまったのである。四国4県の狸が集結することと、徳島県からは四国大学田村ゼミ学生が扮する北島町の源九郎たぬきが代表で参加することになっている。県外での広報活動は初めてとなるが、北島町の源九郎狸をより多くの人に知ってもらえるチャンスであると同時に、それに関わる学生達にとっても素晴らしい経験となると考え、参加の意志を固めている。また、学生達が教職志望であることから、学校関係との連携も考えたい。北島町の学校等で運動会プログラムに源九郎ダンスを組み込むことについて北島町教育委員会に交渉したいと思う。またその交渉を学生が行い、企画実行できるよう指導していきたい。

以上のように、これからも学生達とともに新たなことに挑戦しながら地域活性化の活動意義を伝え学び合いたいと考えている。